

### 3 春日部の藤棚

今年もこの日がやってきた。今日は年に一度の藤まつりの日だ。藤まつりは毎年五月三日に春日部駅西口からのびる藤通りで行われる。和太鼓やマーチングバンド、ソーラン節をはじめ多くの出し物があり、とても盛り上がる。

わたしは、毎年家族でこのまつりに出かけている。今年は六年生のわたしにとって小学校最後の藤まつりだ。まつりを見ながら通りを歩いていくと、父の知り合いの田中さんに出会った。

「あつ、田中さんだ。」

田中さんは、まつりが大好きで、毎年、実行委員をしている。

わたしは正直言うと、田中さんには会いたくなかった。田中さんはまつりのことになると話が止まらなくなるのだ。

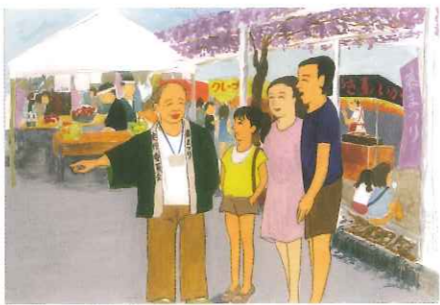
「やあ、こんにちは。」

田中さんに見つかった。

「今年も家族でまつりかい？ いいねえ。」

「今年もがんばっていますねえ。田中さんは、いつから藤まつりにかかわっているんです？」

（ちよつとお父さん、話しかけないでよ……。）



部の人達が楽しく集い、藤を楽しむ。そういうまつりもあるんだよね。だからおれは、そんな藤まつりが大好きでかわらせてもらっているんだ。」

田中さんの言葉を聞きながら、藤棚が目に入ってきた。今まで藤棚なんてあまりじっくり見ることはなかったが、藤まつりをもっと楽しみたい気分になった。

「わたしも藤まつりを楽しんできます。」

田中さんに別れを告げ、父とわたしは、まつりを楽しみながら藤通りを歩いた。

田中さんの言葉を思い出しながら、父と藤通りを歩いていると、藤の花の何ともいえないかおりがただよってきた。

「藤がきれいだね。」

藤の花をながめていると父が言った。

「もともと、ここには藤棚なんてなかったんだ。でも、今から三十年ほど前に、市の花・藤を生かして、春日部市民のいこいの場を作ろうという話がきっかけでここに作る事になったんだ。でも、いざ藤棚を作ろうとしたら、簡単にはいかなかったようだよ。」

父はそう言うと藤棚のつるをさわりながら続けた。

「最初は、つるがあまりのびず、そのためにつるが棚に巻きつかなかったんだ。しかも、十数本がかけられるなどして、とても苦労したそうなんだ。」

わたしは、その言葉を聞き藤棚にさく藤の花を見上げてみ

「一回目からだよ。」

「そうだ優子ちゃん、第一回の藤まつりのことを知っているかい？」

（始まった、長くなるぞ。あの出店に行きたいのに……。）

「いや、聞いたことはありません。でも、今と変わらないんじゃないですか。」

「いや、最初の藤まつりの時には、この藤棚の藤がここまで見事な花をさかせていなかったんだよ。」

「藤の咲かない藤まつりなんてなんだか変だし、さびしい一回目だったんですね。」

「いやあ、まつりはとても盛り上がったよ。そもそも藤まつりはちょうど『春日部の花』が藤に決まり、藤を中心にみんなが集まるうという事で始まったんだ。藤はさいていなかったが、そのかわり多くの春日部の人が集まり、夏まつりとはちがったもり上がりがあったよ。」

わたしはいつの間にか田中さんの話聞き入った。

「一回目の藤まつりでは近くの小学校のパレードや、婦人会の流しおどりもあつたんだ。そうそう、今聞こえる『藤音頭』もその時、初披露されたんだよ。」

藤まつりでは当たり前前に聞こえていた『藤音頭』も一回目からあると聞くと、なんだか堂々と聞こえてくるようになった。

「おれはまつりが好きなんだけど、藤まつりはちがった楽しみ方があるんだよ。普通、まつりといえば、みこしが出てくる夏まつりを思い出すんだが、藤まつりはちがう。春日

た。そこには、藤の花がすっかりさいていて、そんな苦労なんて感じさせなかった。この藤をどうやったらここまで成長させたのだろうか。父に聞いてみると、にこにこしながらまた話してくれた。

「藤をここまで成長させるには、何年にもわたって管理しなきゃいけないんだ。藤棚を作るにはつるを成長させなきゃいけない。つるを棚に巻きつけるのに欠かせないからね。」

でも、ここは公園じゃなくて、いろんな人が通る歩道だ。小さい子からお年寄りまで通るわけだが、藤がじゃまになってはいけない。藤は成長してくるとつるがあつという間にのびる。そのつるがじゃまにならないよう市役所の人や地域の人が定期的に手入れをしているんだよ。」

藤の花の一輪一輪に、多くの人の手間と苦労がかくされていたのだ。そう思うと、目の前の藤の花のむらさき色がいつそうあざやかに見えてきた。



次の日、わたしは通学路の藤棚をじっと見つめた。藤棚にこめられた春日部の人たちの思い、田中さんの言葉、昨日のまつりでの人々の笑顔などを思い出していた。それと同時に、その藤棚がわたしが生まれ育った春日部にあることを感じ、なんだか心が熱くなった。